

ハートフル 三木市子どもいじめ防止センターだより

~きこえる いっしょに考えよう~



「多様性と調和」の未来に向けて

新型コロナウイルスの影響で延期されていた東京2020オリンピック・パラリンピックがまもなく開幕します。今なお国内外で感染が続いている中、選手や関係者などの「命と健康」を最優先にした安全・安心の大会を祈るばかりです。

さて、大会運営の基本的な考え方の1つに、「多様性と調和」があります。多様性とは、たくさんのありさま、いろいろな種類や傾向などがあることです。調和とは、複数のものが偏りや争いがなく、全体がほどよくまとまっていることです。人には、人種、肌の色、性別、性的指向、言語、宗教、政治、障がいの有無など、様々な面で違いがあります。その違いを豊かさとして肯定し、自然に受け入れ、互いに認め合うことが、より多くの人々の幸せや社会の進歩・発展につながるという考え方です。

3つの異なる四角形は、多様性を表しています。
みんながうから、おもしろい。
みんながうけれど、つながれる。
互いに認め合い、支え合いながら、ひとつになる時がやって来ます。 <後略>

(東京2020エンブレムコンセプトムービーより)



この大会をきっかけに、多様なあり方や生き方を認め合う共生社会を目指す歩みをさらに進めていきましょう。違いや多様性を認めにくい集団や環境の中では、いじめや差別が起こりやすくなります。特に、障がいのある人、外国につながる人、性的少数者の人、コロナウイルス感染やその疑いのある人などへのいじめや差別が生まれないように、みんなで注意深く見守る必要があります。

さらに、対話や交流を通して、互いに理解と共感を深めていくことが大切です。そのために、様々な場面で、「自分はどう考えるのか」、「相手はどう考えているのか」、「意見が違った時どうするのか」など、それぞれの思いや考えを出し合ひましょう。

かつて愛知県の人権啓発ポスターで、「わたしの『ふつう』とあなたの『ふつう』はちがう。それをわたしたちの『ふつう』にしよう」というステキなことばに出会いました。あなたも、いじめや差別を生まない学校や職場、地域づくりを目指して、自分なりに「いま、ここで」できることを探して行動に移していきましょう。

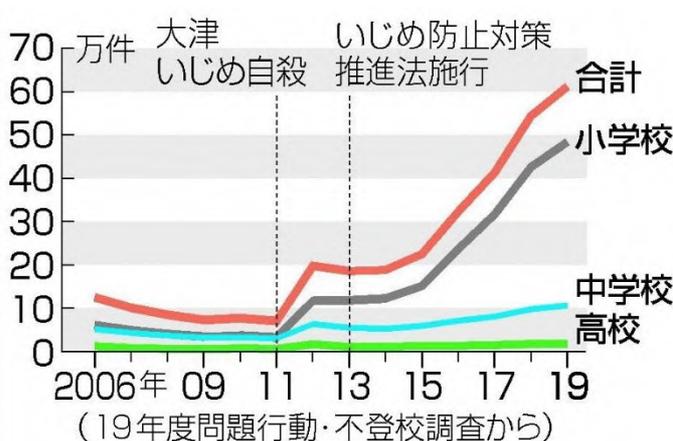
大津の事件から10年、いじめをめぐる状況は？

今から10年前、滋賀県大津市でいじめを苦にした中学2年生の生徒が自殺するという悲惨な事件が起こりました。この事件は社会的に大きな注目を浴び、その後の「いじめ防止対策推進法」の成立・施行、小・中学校における「特別の教科道徳」の実施など、新たないじめ対策のきっかけとなりました。

また、この事件は裁判でも争われ、今年1月、最高裁判所が2審の高等裁判所判断を支持し、判決が確定しました。「自殺したのは元同級生のいじめが原因」と結論づけ、賠償も認めました。さらに詳しい調査に基づき、自殺の危険性や予見可能性も認めました。「いじめは自殺につながる行為」との司法の判断を、あらためて重く受け止めなければなりません。

最新のデータで、昨年10月に文部科学省が公表した2019(令和元)年度の「小・中・高等学校および特別支援学校におけるいじめの認知件数」は、計61万2,496件となり、5年連続で過去最多を更新しました。中でも小学校が急増し、この5年間で約4倍となりました。ただし、

◆2019(令和元)年度 いじめの認知件数



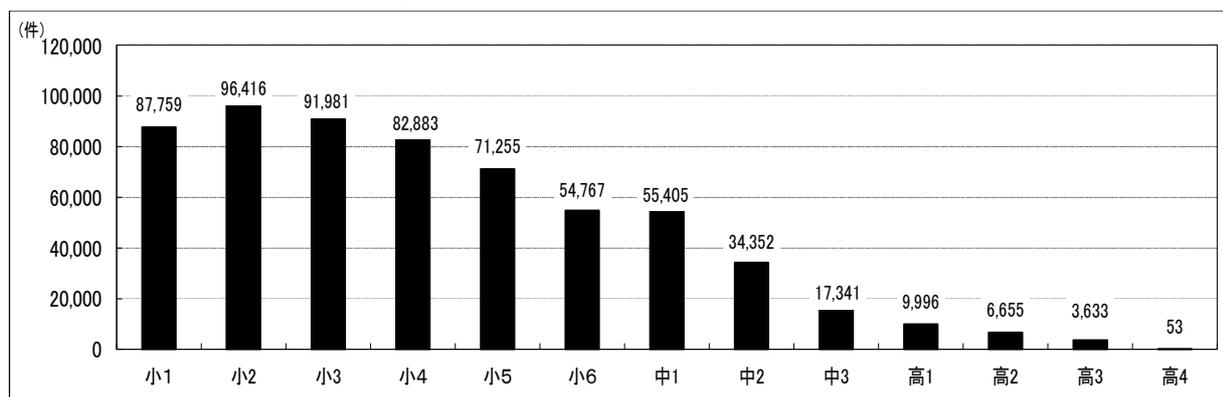
文部科学省は、いじめを被害者の立場に立って初期段階で積極的に認知するように求めており、単純に数字だけを追って深刻さを論ずるわけにはいきません。むしろ認知件数の増加は、学校現場でいじめに対して敏感になり、軽度の事例も積極的に認知しようという動きが全国的に進んでいると言えます。実際に、いじめを認知した学校の割合は、5年前の57%から83%に増えています。

一方、「重大事態」として、生命や心身、財産に重大な被害が生じたり、相当期間欠席を余儀なくされたりするケースもこれまでで最も多く、全体で723件でした。前年度から20%も増えており、深刻に受け止めなければなりません。

また、パソコンや携帯電話等で誹謗・中傷や嫌なことをされる、いわゆる「ネットいじめ」の認知件数も1万7,924件と過去最多となりました。学校別では、8,629件と中学校が最も多いのですが、小学校でも5,608件と、前年度から約1,000件の大幅増加となりました。SNS利用が進み、ますます身近になる中で、ネットに関するルールや道徳をしっかりと定着させていく取組が一層重要となっています。

さらに、いじめの認知件数を学年別に見ると、小学校の低学年が圧倒的に多く、2年生がピークとなっています。この低年齢化の要因について、専門家は、人間関係を築きにくい子が増えていること、幼児期からの悪いことや学校生活への適応等で疲れやストレスをためこんでいる子が増えていることが背景にあると指摘しています。

◆2019(令和元)年度 学年別いじめの認知件数のグラフ



いじめは様々な原因が組み合わさって起こると考えられますが、ほとんどの場合、何らかのストレスや、満たされない心理状態が関係しています。長引くコロナ禍の不安やしんどさも含めて、子どもたちのストレスに気づき軽減するための取組や、生きづらさを緩和するための環境づくりがさらに求められます。

大津の事件について、最初は友だち同士のじゃれあいや遊びでした。それが自分の感情を抑えられずに、また相手の気持ちや苦痛を感じ取れないまま、歯止めがきかずに、どんどん暴力やお金の問題へとエスカレートしていきました。友だち関係も、しだいに上下の関係となり、いじめる・いじめられる関係が固定化していきました。いじめを受けている生徒やまわりの生徒たちには、「同調圧力」(まちがいに気づいていても、まわりの人や雰囲気に合わせてしまうこと)から、「やめて」、「助けて」、「なんとかして」などと声をあげたり、相談したりしにくい状況が生まれていました。周囲の大人は、いじめの実態を見逃し、見過ごし、ストップをかけることができませんでした。

深刻ないじめに発展しないためにも、早期の発見と初期段階での丁寧な対応が最も重要です。「あれ? もしかして…」と、いじめの芽となる言動や子どもたちから発せられる様々なメッセージをキャッチできるよう、アンテナを高く保っておきましょう。

【いじめの初期によく見られる例】

1. 机が離される(避けられる)。
2. 給食を配る時に、後まわしにされる。
3. くつなどの物を隠される。
4. 筆箱など、日常的に使う物に落書きをされる。また不自然にこわれている。
5. 授業中、同じ人の発言を笑う。また、注意や批判が集中する。
6. 仲良くしているようで外されている。遊びの中でいつも負け役にされる。
7. 手紙や交換日記、メールなどで批判や非難をされる。

“いじめは将来にも影響する”から・・・



今年1月、韓国スポーツ界に衝撃が走りました。女子バレーボールの主力選手として、東京オリンピックで活躍が期待されていた双子の姉妹が、子ども時代の悪質ないじめを理由に代表チームから無期限の除外処分となったのです。二人はすでに事実を認め謝罪し、反省の日々を送っているとのことですが、復帰は険しい道のりになりそうです。

一方、元バレーボール女子日本代表選手で、現在スポーツキャスターの大林素子さんが、いじめを受けていた子ども時代のことをネット上で公表されています。小さい頃から背が高かったことから、大きいことに関連するあだ名を付けられ、まわりの男の子たちから邪魔ものみたいに扱われたそうです。

大林さんは、いじりといじめの関係について、「悪意がなくても、言われた側が嫌だったら、それはいじめ。私が受けてきたことは、ずっと言葉の暴力だと思っていました。」とはっきりとされています。さらに精神的なダメージも大きく、「『私はだめなんだ、夢も叶わないし、いじめられるし…』と人格も含めて全否定でした。」と、一時は死のうかと思うほど悩まれたそうです。

幸いにも大林さんは、運命的なバレーボールとの出会いをきっかけに、いじめを乗り越えることができました。「もしオリンピックに出たら、私をいじめていた人たちを見返せるんじゃないか。」「このまま死んでしまったら、私の悔しい思いは伝わらない。」と前向きになり、努力を重ねてオリンピックで活躍することができたのです。

しかし、誰もが大林さんのようにいじめ体験をバネに苦難を乗り越え、明るい未来を築けるわけではありません。いじめを受けた本人はもちろん、その家族も「心の傷」として一生背負っていかなければならないこともあるのです。だからこそ、子どもの心に寄り添っていじめと向き合える大人の助けや支えが不可欠なのです。

もしも、だれかからイヤなことを言われたり、されたりして、つらく、しんどい思いをしている人がいたら、一人でガマンしないでまわりの大人の人に知らせてください。きっとお話を聞いてくれる人がいます。身近な人のほかに、電話やメールなどで相談するところもあります。「恥ずかしい」、「自分のせいだ」などと思わずに、かならず、だれかに助けを求めてください。

「いじめのNO!」、「いじめ見逃しゼロ」、「いじめストップ」が合言葉！
右のQRコードからも相談ができるよ。



三木市子どもいじめ防止センター

電話：0794-82-8110

相談日 月曜日～金曜日

メール：ijime_boshicenter@city.miki.lg.jp

